

書評

[評者]

岩田健太郎

神戸大学大学院医学系研究
科・医学部微生物感染症学
講座感染治療学分野教授



ホワイトライオンも追え！

—ゼブラへのリスペクト、
そして見逃せない鑑別疾患—

志水太郎・原田 拓 監修

● A5 頁 292 2019年4月

定価：本体 3,000 円+税

[ISBN978-4-8157-0159-8]MEDSi 刊

私は変わった主訴の患者さんが大好きだ。

なぜなら、考えてしまうからである。「なんでこの患者さんはこういう訴えをするんだろうか」と。

「いわゆる」不定愁訴の患者のことではない。「いわゆる」不定愁訴をもつ患者のはむしろ定型的だ。「変わった主訴」をもたない。判で押したように似通った主訴で受診される。「お腹の中を寄生虫が這い回っている」とか「風俗にいったあとで体調が悪い」とか「ワクチンを打ったあとで体のあちこちが痛い」とか。

「あれ？」と思う主訴はやはり個性的だ。「最近、顔の表情が陰しくなった」（←パセドウ病でした）、「頭の中が急に真っ白になった」（←脳出血でした。CT 取ったら本当に白かった）、「俺はものすごく頭が良い超エリートのハーヴァードの研究者なのに最近忘れっぽくなった」（←最初は単に変わっている嫌味なアメリカ人と思ったら、西ナイルウイルス脳炎だった。ま、性格は変わっていたと思うが）、などなど。「なぜ、そんな主訴なの？」と、はてなマークがつく主訴。なんとか原因を突き止めたい。患者の訴えの原因を突き止めるのは、誤解をおそれずに申し上げるならば大きな快感である。診断が患者の快癒を導けばなおさら嬉しい。

珍しい病気ばかりを狙って斜め上のワークアップを繰り返すのは、珍しい病気ばかりを連呼する症例検討会みたいで、今ひとつな姿勢だと思う。いつもはコモンな病気を念頭に置いて診療する。当然である。しかし、コモンな病気のことしか考えないのもバランスが悪い。

「個性的な患者」が出現したとき、うまく対応できなくなる。コモンな病気への対応。でも、シマウマのことも頭のどこかに置いている。右にも行けるが、左にも行ける。前にも進めるし後ろにも引ける。武道の達人というか、医療におけるアンドレス・イニエスタというか、まあどのくらいいたとえ話が伝わるかはよくわからないけれど、そのような「重心がどこかにのめり込んで自由が効かない状態」を回避したい。そう思っている。

本書はホワイトライオンを追え、という本ではない。ホワイトライオン「も」追え、という本だ。白いライオンが現れたときに、頭が真っ白になって思考停止に陥らないように。なんでもそうだが事前の準備は大事なのだ。事前のメンタル・トレーニングとして本書はすべての外来診療医が読んでおくべき「重心のバランスをとる」本だ。

それにしても、知らない病態や知らない病名はたくさんあるものですね。いろんな病気がある。いろんな色がある（本文参照ください）。いろんな色がある。あと、どうでもいいですが、爪が黄色くなったときの鑑別診断が「黄色爪症候群」なのは、どうなの？ しかも、対立仮説はない。そこ、どうなの？ テレビに向かって「あんた、なにやってんの？」と、しゃべりつづける主婦よろしく、みなさんも本書を読みながら、「そこ、どうなの？」とツッコんでみてください。楽しいですよ。